

## 紹介

宮川 満著

### 太閤検地論 第三部

サブタイトルに「基本史料とその解説」とあり、既刊の第一部・第二部において、宮川氏の所説を構成する上に用いられた史料のうち主なものを収めている。

第一章は「土地関係冊子類」。永正四年の山城国上久世庄算用帳から慶長六年の甲斐国隼村水帳まで一九点の冊子が含まれ、頁数では全体の三分の二近くを占め、著者もいう通り「史料編の中心をなしている」。このうち秀吉の検地帳は河内加納村（天正十一年）以下六点、戦国大名のそれが六点、荘園寺社領が六点、江戸時代一点となっている。このような配分にしたのは、「太閤検地直前の土地関係が具体的にはほとんど明らかでないから」である。

この観点には以下の章にも引継がれ、第二章「戸口関係冊子類」は、元亀から承応にいたる期間の家数改・人数帳など九点、第三章「土地・民政関係文書類（領主側）」では、秀

吉の検地条目・知行宛行状・刀狩令など太閤検地に直接かわる法令のほか、結城家法度・義治式目をはじめ武田・今川・朝倉・北条等の諸氏の文書をおさめ、「領主側の意図ないし政策の方向」を把握させようとしている。

第四章「土地・村落関係庶民史料」は、これにたいして室町末から江戸初期にかけての農民の指出・請状・訴状・村掟・売券などの文書・記録類を掲げている。この中には本誌上でも論議の対象となった近江井戸村文書など興味深い史料が含まれており、検地実施の具体的様相を知ることができる。

全体としてみると、地域的には摂津・河内・近江・越前の史料が多いのもひとつの特徴であろう。もちろん、これはあくまでも『太閤検地論』の史料編であって、単なる史料集ではない。著者の蒐集された膨大な史料のうちから、著者の所論の系統に従って選び出されたものであり、その意味の傾向性を有している。しかし、それだけに、後学が著者の仕事を吸収、検討する上にはすこぶる便宜な書物であり、古代史や中世史にくらべて基本史料の公開がおくれ、同一史料にもとづく共同

討論の場が局限されている近世史の研究者にとって、その余慶も多いものと信ずる。著者に感謝するとともに、これを手がかりとして、この時期の研究がさらに進展することを、多くの研究者とともに期待したい。（A5判四五〇頁、定価二、〇〇〇円、一九六三年六月刊、お茶の水書房）（朝尾直弘）

### 白峰村史 上巻

白峰村は石川県の東南隅・手取川の上流にあり、白山を村域にもつ村。さきに刊行された下巻史料編について本編とも称すべき部分が上巻である。

第一部白峰村の自然環境、第二部村のすがた、第三部村のおいたちの三部と付録の史料・補遺・年表等から成る。第二部は明治二十二年の村制施行以後を政治・経済・信仰と習俗・社会と教育等の分野にわけて叙述しており、明治十一年の白峰製糸社設立以来の製糸業の消長、山村の生活・年中行事とその変遷・衣食住・方言などが興味をひき、なかでも出産から元服・婚姻・葬送にいたる習俗を

「人の一生」として総括しているのはおもしろい。付録に二二〇種に及ぶ家印を収録している。

歴史家としての関心は第三部によせられるが、そこでは白山信仰の成立について泰澄伝説を吟味し、加賀国造家の豪族道君との密接な關係を指摘しており、また、一向一揆の時代には、能美郡四組のうち山内組に組織されたこの地域の動きを、加藤藤兵衛なる土豪に焦点を合わせて叙述している。藤兵衛は、十六世紀のはじめこの谷の歴史に現われ、ときに一向一揆と対立し、ときに提携し、さらに柴田勝家の家臣団に組込まれ、また郷代官・大庄屋・役人として生きのび、その間元和年間には耕地の乏しい一帯に灌漑用水路を開鑿するなど、地域の小領主として活動を続けたが、十七世紀後半にいたり、ついに加賀・越前兩藩と対立し追放されたのであった。

山村の特殊な農業経営形態に「なぎ」（焼畑）がある。広大な山地への零細な出作りは江戸時代から注目されていたが、最初は奥地への「通い」から、しだいに広い範囲への数年ないし半永久的な「出作り」に転化したものと推定される。村史は、その時期を水田開

発の進展と関連させ元和・寛永期とみてゐる。なぎ畑の用益地「むつし」の初見史料は慶長年間であり、その用益権は田畠同様、売買・譲渡・年季作の対象となった。経営の実態についての記述は豊富であきない。

以上、筆者の関心のままに紹介したのは、編集責任者若林喜三郎氏以下多数の専門委員の分担執筆が、それぞれに内容充実している、容易に要約し難いためであることをおこたわりしておく。（昭和三十七年一月刊、白峰村史編集委員会）（朝尾直弘）

## 岡山県の歴史

岡山県政九十周年を記念し、併せて第十七回国体に際しての岡山県のPR（？）をかねて、『岡山県の歴史』が刊行されている。岡山大学の藤井駿・谷口澄夫・水野恭一郎三氏を編さん委員に、他に岡山県地方の歴史の研究者二十三人を協力者として、全約八〇〇頁のなかに、第一章「郷土のあけぼの」から、ひらけゆく古代社会、武士の世、藩政のころ、のびゆく岡山県、そして最後戦後の躍進から、

水島工業地帯、瀬戸内海の「夢のかけ橋」、中国縦貫自動車道路への期待といった未来図までを、まことに要領よく、しかもわかりやすく、岡山県の通史がまとめられている。編さんにあたって、「庶民階級の歩んだ道をつぶさに記録し、なるべく県民の生活に結びついたことを中心とする」などの基本方針がたてられた由であるが、章節のたて方も、叙述の方法にも、「中学校卒業程度」の人々にも県史を読ませ、理解させようとする努力がよくゆきとどいているように思われる。政治史の、通史としての流れはむしろ簡単に、代って岡山県の歴史に即した庶民の歴史、農業や漁業や手工業などの産業、村々のくらし、土一揆や百姓一揆の、生活を守るたたかい、そして浄土宗や法華宗や金光教などの庶民の宗教が、より大きなウエートを占めて書かれている。全体年表を含めて八〇〇頁であってみればさまで大冊というわけではないが、その中で中世（武士の世）にあつて「鎌倉新仏教のおこり」「地方都市の発達と諸産業」「備前法華のひろまり」、近世（藩政のころ）にあつては「村のくらし」「ひらけゆく新田」「進みゆく産業」「交通と商業」「町人の生活」「民